

萬葉集における略音仮名と二合仮名

—— 韻尾ごとの偏向をめぐって ——

尾山 慎

はじめに

萬葉集において、子音韻尾字は韻尾以下を捨象した略音仮名と、韻尾に母音を付加した二合仮名という二形態で認められる（参考…尾山慎 [2005-a]、同 [2006-a]、同 [2006-b]）。以下に、集中から例示する。

p…「雜豆臍」（さひつらふ）二合仮名／卷七・一二七三人麻呂歌集非略体歌旋頭歌

t…「持有越水」（持てるをち水）二合仮名／卷一三・三二四五作者未詳

…「用流能伊味仁越」（夜の夢にを）略音仮名／卷五・八〇七大伴旅人

k…「作樂花」（さくらばな）二合仮名／卷一三・三三〇九人麻呂歌集非略体歌

…「作夜深而」（さよふけて）略音仮名／卷七・一二四三作者未詳

m…「獨鴨念」（ひとりかも寝む）二合仮名／卷四・七三五大伴坂上大嬢

n…「散釣相」（さにつらふ）二合仮名／卷一三・三三七六作者未詳

…「散和久御民毛」（さわく御民も）略音仮名／卷一・五〇藤原宮

役民

ng…「鍾礼乃雨者」（しぐれの雨は）二合仮名／卷八・一五九三大伴坂上郎女

…「雲根火雄男志等」（うねびををしと）略音仮名／卷一・一三天智天皇

集中で、略音仮名はおよそ七七〇〇例、二合仮名はおよそ三〇〇例存在^{〔注1〕}する。のべ用例数はこのように略音仮名のほうが圧倒的多数であるが、p、t、k、m、n、ngという韻尾ごとの略音・二合の割合にはかなりの差異がある。

集中で確認される子音韻尾字は以下の通り。

「入声字」

p入声

甲羅風匠塔臍

t入声

壹鬱吉結乞薩日伐八必別末勿列烈越物

k入声

憶各極作叔拭色式積則俗賊筑得德特泊薄福莫幕目木欲落樂

〔撥音字〕

m撥音

敢甘監金兼陰今瞻三點南念濫藍覽廉

n撥音

安印雲干漢君讚散信新准盡丹彈珍陳天田難仁年伴半嬪粉弁返反邊

便煩遍萬滿敏民面聞文延隣連丸遠袁怨

ng撥音

香凝興相鍾僧曾宗當登等騰藤農濃寧能平房芳防方朋望蒙容用楊良

浪

一見して分かれるとおり、各韻尾ことで字種数にまず開きがある。また、冒頭に例示したように、一字で略音・二合両方に通用する字種も存在する。

本稿では、略音と二合との二形態の、韻尾それぞれにおける偏りがどういった由来を持っているのかについて、韻尾ことの分析に加えて、子音韻尾字が日本語環境に取り入れられ開音節化するという現象にも手がかりをもとめ、考察を加える。

一、字種の分布

一、一 形態別の分布

前述のように、萬葉集においてこれら子音韻尾字は略音仮名か二合仮名で使われるが、一字種で両方の形態として使われている場合もある。以下、各種韻尾ことにあらわれる字種を列挙し、両形態にあられるものについては網掛けを施して示す。

表1 入声字音仮名字種

	p	t	k
略音	甲 越吉結日八伐必別末勿物列烈	憶作積式目樂則俗賊得特泊薄	憶作積式目樂則俗賊得特泊薄
二合	雜瓊匣塔騰	越壹薺乞薩	莫福幕落

p入声字には、略音二合両方の通用例がなく、またt入声では一字のみ、k入声では六字が両形態通用とややひらきが出ている。具体的に用例をみてみよう。

t入声字「結」…略音仮名

和備曾四二結類（わひそしにける）／卷四・六四四 紀郎女

t入声字「越」…略音仮名／両形態通用

用流能伊味仁越（夜の夢にを）／卷五・八〇七 大伴旅人

t入声字「越」…二合仮名／両形態通用

越乞尔（をちこちに）／卷六・九二〇 笠金村

k入声字「則」略音仮名

和何則能尔（わがそのに）／卷五・八三二 大伴旅人

k入声字「樂」…略音仮名／両形態通用

作樂花（さくらばな）／卷二・三三〇 九人麻呂歌集非略体歌

k入声字「樂」…二合仮名／両形態通用

我戀樂者（あがこふらくは）／卷二・二七二五 作者未詳

字種の偏りでみると、二合仮名に偏るのがp、略音仮名に偏るのがt、いずれにも通用される字が比較的多いのがkとあらわれている。次に撥音字をみてみよう。

表2 撥音字音仮名字種

ng	n	m	略音
香凝興相鍾僧曾宗當登等騰藤 農濃寧能平房芳防方朋望蒙容 用楊良浪	雲君散難萬安印干漢讚信新准 盡丹珍陳天田仁年伴半嬪粉弁 返反邊便煩遍滿敏民面聞文延 隣連丸遠袁怨	南敢甘監金兼今念濫藍覽廉瞻 點陰三	二合

以下、いくつか具体的に例を挙げる。

n 撥音字「散」…略音仮名／両形態通用

幾許毛散和口（ここだもさわく） 卷六・九二四／山部赤人

n 撥音字「散」…二合仮名／両形態通用

散頼相（さにつらふ） 卷一一・二五三／作者未詳

ng 撥音字「等」…略音仮名

神佐備世須等（神さびせすと） 卷一・四五／柿本人麻呂

ng 撥音字「鍾」…二合仮名

鍾礼乃落者（しぐれの降れば） 卷一三・三三三／作者未詳

入声字の場合と同じく字種の偏りでみると、二合仮名に使われる場合が多いのはm、略音仮名で使われる場合が多いのはng、いずれにも通用される字が比較的多いのがnであるとわかる。次項にそれぞれの字種が該当する音節を一覧にして観察する。

一、二 音節別分類

ここでは、それぞれの韻尾字がどの音節の文字として機能しているかを概観しておく。※□囲みの数字は音節種ののべ数である。

表3 音節種

k	t	p	略音	二合
憶オ、作サ、積サ、式シ、則 ソ甲、俗ゾ甲、賊ゾ乙、得ト乙、 特ト乙、泊薄ハ、目木モ、欲ヨ 甲、樂ラ	吉キ甲、結ケ甲、日ニ、伐バ、 八ハ、必ヒ甲、別ベ甲、末マ、 勿物モ、列烈レ、越ヲ	甲カ	雜サヒ、颯匣サフ、塔タフ、 臈ラフ	13
13	11	1	4	6
落ラク	壹イチ、鬱ウツ、乞コチ、薩 サツ、越ヲチ、越ヲト			
13	6	4		

略音		二合	
ng	安ア、印イ、雲ウ、君ク、散サ、新准シ、盡ジ、天テ、陳チ、田デ、難ナ、仁ニ、年ネ、伴半ハ、嬪ヒ ^甲 、邊弁返反ヘ ^甲 、便ベ ^甲 、煩ボ、萬満マ、民ミ ^甲 、面メ ^甲 、聞文モ、隣リ、連レ、延江、袁遠怨ヲ	雲ウネ、干漢カニ、君クニ、萬マニ、散サニ、讃サヌ、信シナ、丹タニ、彈タニ、珍チヌ、難ナニ、粉フニ、遍ヘニ、敏ミヌ、丸ワニ	[26]
	南ナ		
m	香カ、興コ ^ミ 、凝ゴ ^ミ 、宗ソ ^甲 、曾僧ゾ ^ミ 、登等藤騰ト ^ミ 、騰ド ^ミ 、寧ナ、濃農ヌ、能ノ ^ミ 、方芳房防ハ、平ヘ ^甲 、朋方ホ、望蒙モ、楊ヤ、容用ヨ ^甲 、良浪ラ	敢甘カム、監兼陰ケム、金今コム、三サム、瞻セミ、點テム、南ナム、南ナミ、念ネム、監監覽ラム、廉レム	[11]
	[17]		
ng	香カ、興コ ^ミ 、凝ゴ ^ミ 、宗ソ ^甲 、曾僧ゾ ^ミ 、登等藤騰ト ^ミ 、騰ド ^ミ 、寧ナ、濃農ヌ、能ノ ^ミ 、方芳房防ハ、平ヘ ^甲 、朋方ホ、望蒙モ、楊ヤ、容用ヨ ^甲 、良浪ラ	香カゲ、香カゴ、鍾シゲ、凝コゴ、相サガ、當タギ	[6]
	[17]		

大野透「[363]」は、上代文献中の仮名を考察し、その韻尾字が対応している音節の種類の多寡をもって、単音節仮名としての使われやすさの指針としている。つまり、一音節仮名として多くの音節種があらわれておれば、それはすなわち韻尾が捨象されやすいことのあらわれだともみている。

表3で見れば、略音仮名音節が多いのは入声字ではk韻尾、撥音字

ではn韻尾である。しかし、同時にこれらの韻尾字では二合仮名の音節も決して少なくないことが注意される。また、先に表1、2で見たように、k韻尾字・n韻尾字の特徴として、略音・二合のいずれでも使われる字を他にくらべて多く擁している点があげられる。このことから、音節種だけに注目するのではなく、略音と二合の占める割合にも注意すべきと考える。次項では、仮名としてどれほどに使用が蓄積されているか、という観点でみてみよう。

二、のべ用例数分布

二、一 分布

ここでは、形態別に韻尾ごとの用例数を検証する。また、参考として仮名主体表記、訓字主体表記別にも計上する。まずは略音仮名からみておこう。※訓字主体表記は巻一、二、三、四、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十六、仮名主体表記は巻五、十四、十五、十七、十八、十九、二〇で計上した。

表4 略音仮名（表記主体別のべ用例数）

合計	訓字主体	仮名主体	
1	1	0	p
457	76	381	t
257	48	209	k
3	2	1	m
1623	426	1197	n
5333	1478	3855	ng
7674	2031	5643	合計

表より、字種や音節数で最も多かったkやnが、のべ用例数では入声、撥音のそれぞれで首位でない点、注意される。次に二合仮名を掲げる。

表5 二合仮名（表記主体別のべ用例数）

	仮名主体	訓字主体	合計
p	0	5	5
t	0	23	23
k	13	49	62
m	6	104	110
n	11	60	71
ng	2	28	30
合計	32	269	301

さて、この表4、5で得られた傾向を先の表1、2、3と併せて以下に、韻尾ごとで解釈してみよう。

二、二 入声

p…二合仮名の方が字種も用例数も多くなっている。したがって韻尾は残存しやすい字として扱われていると解釈できる。なお、一字種一例ずつしかなく、継承性は希薄で、臨時的な運用がなされている。

t…字種の数は入声字三内音のうちでは中間に位置し、kより少ないが、累積用例数自体は入声字でもっとも多く、略音仮名が二合仮名を大きく上回っている。略音仮名として使われる場合に汎用性

の高さを示す。

k…字種は最も多いが、総用例数はtより下回る。二合仮名と略音仮名の両方に使われる字が三音の中で最も多い。略音仮名として使われる場合は、ある程度繰り返し用いられるが、二合仮名は一回的・臨時的なものが多い（詳細は尾山慎「2006-a」に論じている）。

二合仮名と略音仮名それぞれにおける音節数はほぼ拮抗しており、必ずしも韻尾は捨てられやすいとはいえないと考えられる。

以上、字種とのべ用例数、そして略音・二合への偏向度合いから、それぞれの形態における偏りを不等式で表せば、

略音仮名としての偏り

$t \vee k (\vee p)$ （pは用例総数が少ない。六例中五例が二合仮名である）

二合仮名としての偏り

$(p \vee) \quad k \vee t$

となる。

次に同じく撥音字について解釈されることをまとめよう。

二、三 撥音

m…字種もののべ用例数も二合仮名の方に大きく偏っており、ほぼ韻尾は残存する形で使用されるといってよい。用例数も二合仮名が略音仮名を圧倒している。

n…三音のうちもっとも字種が多く、略音・二合ともによく使われている。略音仮名の場合は繰り返し運用が多いが、二合仮名はやはり一回性のものが多い。ただし、いずれも最も多いわけではなく、略音はngのほうが、二合はmのほうが多い。二合仮名の用例数、

また二合仮名と略音仮名のいずれにも使われる字種が他にくらべて多いことからして、必ずしも韻尾は捨てられやすいとはいえないと考えられる。

ng・二合仮名が多数を占める m 韻尾とは逆に、略音仮名が圧倒的に多く、字種も略音仮名のほうが多い。ng 韻尾字は、略音仮名として主に機能する字音であったといえる。

さて、先とおなじく、それぞれの形態における偏りを不等式で表せば、次の如くである。

略音仮名としての偏り

ng ∨ n ∨ m

二合仮名としての偏り

m ∨ n ∨ ng

以上のことから、入声字において韻尾が残りにくいのは t 入声、撥音字では ng 撥音であり、逆に韻尾が残りやすいのは入声字においては p 入声、撥音字では m 撥音であることが判明した。残る k 入声、n 撥音はいかなればそれぞれの間位置することになる。したがって、あるひとつの韻尾が韻尾捨象（略音）と母音付加（二合）のいずれにも秀でて他を圧倒することはなく、入声・撥音ともに、二合に偏る韻尾（p、m）、略音に偏る韻尾（t、ng）、そしてその中間に位置する韻尾（k、n）があるという傾向を見せている。

以上述べきたったような傾向が生じる理由を考える上で、日本語環境における字音の開音節化の在りようにてがかりを求めたい。

三、字音語資料における日本漢字音を手がかりに

三、一 声明資料

上代日本語が開音節構造であることにはほぼ疑いはないといえる。しかし、入声・撥音の計六種の韻尾は、いずれの環境においても全て開音節化されたわけではなく、中国原音のまま学習されることもあり、奈良時代を過ぎてもなおそれが継続されている場合もあった―たとえば仏典読誦など―。これは平安朝以降の漢文直読資料に付された訓点、あるいは声点、振り仮名などから立証されていることである。^(注3)ここでは、そういった保守性の高い資料にみる子音韻尾字の在りよう、およびそれに関する先行指摘を参考に、仮名による日本語表記とは違う場における字音の音韻変化に注目してみたい。

日本語を仮名で表記するのとは異なる場―それは字音語の世界である。しかしながら上代には字音語音韻の実態を明確に語る資料に乏しいので、ここでは時代はやや下るが、漢字音に関して高い保守性をもつことで知られる資料―仏典声明資料を参考としたい。橋本進吉 [1950] が「過去の國語の發音を考へるに當つては有力なる參考資料となる」と指摘したように、国語音韻史研究において仏教声楽の譜である声明資料は非常に貴重なアクセント・音韻資料とされる。金田一春彦 [1964] が真言宗所用の『四座講式』の施点、博士などから鎌倉時代のアクセントを復元したことはその代表的成果である。論者も、真言宗で尊崇される重要經典の声明資料『般若理趣經』における四声アクセントなどについて加點博士を分析考察し、その高い保守性、資料的価値を指摘したことがある（尾山慎 [2004]、尾山慎 [2005-b]）。

このように、声明資料は日本漢字音の在りようや変化を考究する上で非常に有効な視点を提供する。以下、韻尾別に、従来、声明資料をもとに指摘されてきたことについて確認し、前節までに見られた韻尾ごとの分布との整合性を検証していきたい。

三、二入声

浅田健太郎〔2000〕では、成立時代の異なる種々の声明集における節博士と仮名の検証を通じ、結果、喉内入声音/k/が、舌内/t/よりも先に母音付加されたという経緯が裏付けられている。これによって従来漠然と説かれるのみであった開音節化の序列はp、k、tの順であったことが明らかにされたのである。^(注4)この開音節化の序列は、上にみてきた萬葉集における入声字の二合仮名と略音仮名の使用度数の関係に整合する。つまり開音節化が早いとされるp入声字はやはり二合仮名が多く、略音仮名は少ない。しかし、開音節化が遅いとされるt入声字は略音仮名として用いられることが多く、しかも繰り返し用いられるといった汎用性の高さを有する。略音仮名として使われやすい字、二合仮名として使われやすい字という特徴が、ちょうど字音が開音節化していく序列のとおりあらわれている。前節で中間に位置するとしたk/は略音にも二合にも比較的よく使われる仮名であり、開音節化の序列においてもやはり中間である。

三、撥音

前節までにも見たように、m韻尾とp韻尾は母音付加形の二合仮名が圧倒的に多く、他の韻尾とは一線を画する存在である。この二種の

韻尾に共通するのは調音器官が両唇という点である。木下正俊〔1954〕は、この二種の韻尾字に母音付加形の仮名が多い点については、唇をあわせることで発音が比較的明瞭に意識されたためであり、聴覚的に聞き逃し得ない響きをもつからだと指摘している。先にみた、入声字におけるp入声の開音節化の早さに鑑みても、両唇音という調音方法に起因する現象と位置付けることは首肯される。

また、ngは、集中の用例や、また飛鳥池出土の音義本簡におけるng韻尾字「熊」字の注である「汗吾」表記からわかるように、韻尾が残る開音節形の場合ガ行音であるが、平安時代にはいるとこれらはウに転化している。ng韻尾の鼻音性が弱化してしまい、開音節化することなく母音のウとなったことが示すように、音節としての独立性が最も低いのはngであった。n韻尾、m韻尾字は平安朝に生起した音便のため、入声のような開音節化への道はたどらず、日本語において特殊音素とされる単独子音音節を形成する。なお浅田健太郎〔2005〕において、「真言宗声明相応院流と、(天台宗の―引用者注) 聖宣本声明集においてはm韻尾と認識され「ム」で表記されたものは、「ン」で表記されたものより独立性が高い」ことが明らかにされている。

以上より、漢字音として撥音字の韻尾は、その独立性の高さにおいて、m、n、ngの順で差違があるものとして受容されていたとみて支障ない。この序列は、やはり入声字音仮名の場合と同じく、略音仮名主体のものと、二合仮名主体のものとに適合する。独立性の高いm韻尾字は二合仮名として主に機能し、独立性の低いng韻尾字は略音仮名として主に機能している。

以上、表4、5でみた用例分布は、字音語環境における漢字音変化

の現象と相通するものとわかる。韻尾を捨てて略音仮名とすること、あるいは韻尾を付加して二合仮名とすることにおいて、日本語が漢字音を取り入れるその際の変容が、かかる分布をなす要因となっているものと考ええる。

おわりに

漢字音を素材に音仮名として用い、日本の「ことがら」を記すこと――その嚆矢は固有名詞表記であった。そして次第に非固有名詞をも仮名表記するに伴って、その仮名字種もまた増加していく。そういった趨勢の中で、子音韻尾字も、子音韻尾という日本語音節にとって特殊な音素を持つにもかかわらず、それを捨象あるいはそこに母音を付加して日本語表記へと運用された。子音韻尾字音仮名とは、多様を極める日本語の表記に要求されて、漢字音を変容させ、機能したものであった。そしてその変容の根本には、話者に備わる音韻体系によって導かれた漢字音の音韻変化（和化）がある。従来、字音と仮名との対応についての研究では、中国側の音韻的対立を混同して日本語音節へと帰納している点が特に照射されてきたと思われる。たとえば牙音と喉音の区別無く力行音字母としていることなど、萬葉仮名と漢字音との関係における「和化」の問題といえは、まずそこに議論が集中してきた。しかし、本稿でみてきたように、開音節化という大きな漢字音和化の在りようもまた萬葉仮名運用から看取できるのであり、萬葉仮名と漢字音との間に介在すると考えられる「和化字音」を研究する上でも、重要な指針を与えることといえよう。

[注]

注1) 本稿における萬葉集の用例はCD-ROM版萬葉集木下正俊・校訂・塙書房 平成十四年二月に依拠している。また、これを元にデータベースを作成し、考察における各種統計で数値算出した。なお、考察対象は歌本文に限っている。

注2) 論者はこれまでに子音韻尾字音仮名の様相についていくつかの指摘を行ってきたが、やはり、子音韻尾字がなぜ日本語表記に取り入れられ、用いられなければならないかというところが最も大きな問題としてある。萬葉集の用例はいわば使用蓄積の結果であるが、ひとつの資料としての用例数が多く、またその様相も多岐にわたっているため、まずは今回これを取り上げて考察を加えるものである。今後、木簡をはじめとする萬葉集以外の資料も視野にいて、この問題についての考究をさらに深めたい。

注3) 声明における日本漢字音の研究の最新成果としては、本稿にて引用した浅田氏の論のほか、沼本克明〔1997〕『日本漢字音の歴史的研究』（汲古書院）があげられる。

注4) 筆者は尾山慎〔2004〕、尾山慎〔2005-b〕においては入声字として一括して韻尾独立性をみたのであるが、今回、p、k、tの各韻尾ごとで加點博士をもとにその独立性を調査したところ、独立性はp 17.9%、k 11%、t 4.6%と出、韻尾の独立性―開音節化のしやすさの序列はp > k > tの順であることが判明した。これは本論中にも引用した浅田氏の指摘に整合するのであり、単独文献でも同様の傾向が得られたことになる。

〔引用文献〕

- 浅田健太郎 [2000] 「声明資料における人声音」(『国語学』第51巻3号 2000.12)
- 浅田健太郎 [2004] 「漢字音における後位モーラの独立性について—仏教声楽譜から見た日本語の音節構造の推移—」(『音声研究』82 2004)
- 浅田健太郎 [2005] 「声明譜における「ム」「ン」両仮名の書き分けについて」(『訓点語と訓点資料』第114集 2005.3)
- 内田賢徳 [2005] 『上代日本語表現と訓詁』(塙書房 2005)
- 大野透 [1962] 『萬葉仮名の研究』(明治書院 1962)
- 尾山慎 [2004] 「声明資料『般若理趣経』における加點博士とその改変—国語音韻資料としての意義—」(『文学史研究』44号 2004.3)
- 尾山慎 [2005-a] 「萬葉集における入声字音仮名—連合と略音—」(『國語や國文学』第81巻8号 2005.8)
- 尾山慎 [2005-b] 「声明資料『般若理趣経』加點博士について—仁和寺本五音博士を中心として—」(『訓点語と訓点資料』第114集 2005.3)
- 尾山慎 [2006-a] 「萬葉集における二合仮名について」(『萬葉語文研究』第1集 2006.3)
- 尾山慎 [2006-b] 「萬葉集における撥音韻尾字音仮名について—連合と略音—」(『萬葉』一九五号 2006.7)
- 木下正俊 [1954] 「管内韻尾の省略される場合」(『萬葉』10号 1954.1)
- 橋本進吉 [1950] 「國語史研究資料としての聲明」(『國語音韻の研究』岩波書店 1950)

〔参考文献〕

- 井手至「萬葉仮名」(佐藤喜代治編『漢字講座』4 明治書院 1980)
- 井手至「仮名表記される語彙」(『遊文録 国語史篇1』和泉書院 1999)
- 大銅隆「上代文字言語の研究」(笠間書院 1992) 主に第一章33頁から83頁
- 大銅隆『木簡による日本語書記史』(笠間書院 2006)
- 大塚毅『萬葉仮名音韻字典』上巻・下巻(勉誠社 1978)
- 大野透『萬葉假名の研究』(明治書院 1963)
- 大野透『續・萬葉假名の研究』(東京高山本店 1977)
- 沖森卓也「子音韻尾の音仮名について」(『鎌倉時代語研究』第二十三輯 2000)
- 春日政治『仮名発達史序説』(『春日政治著作集 第1』勉誠社 1933)
- 姜斗興『史読と萬葉仮名の研究』(和泉書院 1982)
- 高松政雄『日本漢字音概論』(風間書房) 主に第二章「萬葉仮名」
- 沼本克明『平安鎌倉時代に於ける日本漢字音に就いての研究』(武蔵野書院 1982)
- 沼本克明『日本漢字音の歴史』(東京堂出版 1986) 主に第一章58頁から100頁
- 沼本克明「漢字の字音」(佐藤喜代治編『漢字講座』1 明治書院 1988)
- 沼本克明「字音假名遣いについて」(築島裕編『日本漢字音史論輯』汲古書院 1995)
- 沼本克明『日本漢字音の歴史的研究』(汲古書院 1997)
- 橋本四郎「多音節假名」(『澤瀉博士 萬葉學論叢』澤瀉博士喜壽記念論文 喜壽記念)

集刊行會 1966)

前田富祺「古代中世の漢字研究」(佐藤喜代治編『漢字講座』2 明治書院 1989)

馬淵和夫「上代〔日本語・音韻の歴史〕」(『解釈と鑑賞』第25号 1960.9)

三吉陽「入聲音より見た人麻呂の用字法」(『萬葉』第7号 1953.4)

毛利正守「和文体以前の「倭文体」をめぐって」(『萬葉』185号 2003.9)

森博達『古代の音韻と日本書紀の成立』(大修館書店 1991)